

# 抽象的な愛と具体的な愛

まぐ

もう十年ほど前の話になる。

僕は、旧帝大だという理由だけで北大の経済学部に入學した。偏差値の高い大学に入れば、幸福な人生が待っていると盲信していたのだ。だが、その盲信は呆気なく崩れ去った。入學当初は期待を膨らませていたものの、講義は面白くないし、友人も出来ない。バイトも続かなかった。酒を毎夜浴びるように飲み、留年しない程度に学校へ行くだけの生活スタイルが続いた。三年生になって就職を意識するようになると、「これからの一生を仕事に費やし、心身を消耗して犬死にするのだ」という悲観的な観念に囚われるようになった。

その頃に入った経済思想のゼミが、転機だった。そのゼミでは、新聞のスクラップ、英単語のテスト、レポートなどの課題が毎週課せられた。まだまだ単位を取得しなければいけない僕にとって、これらの課題は多大な負担になった。そして最も頭を悩ませたのが、三年前期の終わりに行われる個人発表だった。そのテーマを見つけられない僕は、ゼミの教授に、今まで読書を全くしてこなかったこと、経済学に全く興味がないこと、人生に対する虚無的な思いを正直に打ち明けてみた。その時、個人発表の主要文献として教授が勧めてくれたのが、エーリッヒ・フロムの『愛するということ』である。経済と関係のないテーマでも良いとのことだったので、僕は教授から本を借りて、家で少しずつ、今よりも遥かに遅いスピードで読み進めていった。

「人間は孤独に対する根源的な恐れを持っており、それを愛することによって克服する」という本書のテーマは、僕にあつらえ向きだと思った。何せ、僕は酔った勢いで毎夜のように知人の女性たちに電話をかけて孤独感を発散していたのだから。そうした自分と重ね合わせるように『愛するということ』や他の参考文献を読んだ。レジュメを作り上げた。そして個人発表に臨んだ。

結果、僕の個人発表は「結論を出すことを恐れる学生が多い中、はっきりとした結論を出している」という点で教授から評価して貰えた。今思えば、「愛」や「孤独」といったキーワードを定義すら出来ていなかった稚拙な発表にもかかわらず、僕の長所を褒めてくれたことは、自信や知識欲を高めてくれた点で非常に感謝している。もし、この時の教授と出会っていなければ、僕は自信欠如のまま、暗い人生を送っていただろう。自主的な学習が求められる大学で、ただ卒業出来れば良いという学生を沢山見てきた。そうした学生の潜在能力を引き出すため、読書や学問の面白さを伝える工夫も大学の大切な役割だと僕は思っている。

その後、自分の興味を見つけ、文学研究科の大学院生になった僕は、不思議な体験をした。あらゆる人間存在と一体感を抱き、あらゆる人間存在を愛し、深い恍惚感に浸る、「人類愛への気付き」と呼べる体験である。当時交際していた女性との別れが、人間存在の秘密めいた部分を明らかにしてくれたのかもしれない。後にこの体験が、心理学では「至高体験」や「変性意識」、宗教では「神秘体験」と呼ばれるものであり、また、多くの哲学者が独自の概念で提起しているものだとも分かった。僕はそれらに関する本を読みあさった。同種の体験をヘッセや三島由紀夫の著作内にも発見した。いつしか、「人類愛への気付き」の体験は、僕の思想の核となっていた。

大学院を健康上の都合で中退して以来、家で出来る小説執筆に励むようになっていた僕は、たまに覗いていたパブでのエッセイコンテストを知った。「私に影響を与えた一冊」は『愛するということ』以外ないだろうと思い、軽い気持ちで再読してみた。そこでは、僕のいう「人類愛

」が「兄弟愛」として説明されていた。

「人は兄弟愛において、すべての人間との合一感、人類の連帯感、人類全体が一つになったような感覚を味わう」

この文章を読んだ時、昔は本書を何も理解していなかったという思いと共に、「僕の思想の核は、僕が初めて触れた思想と同じものだった」という、「青い鳥」の話にも似た自分の境遇に思わず笑ってしまった。だが、読み進めていく内に次の文章にも出会ってハッとさせられた。

「人間そのものを愛することはあくまで特定の人間を愛することの前提なのである」

つまり、僕の愛は「人類」という抽象的なものに留まっていると知ったのだ。

具体的な「個人」を愛することへの修練として、フロムは「道徳的であること」を重んじているように思う。しかし、僕にはこの点がしっくり来なかった。僕が不道徳な家庭で育ったこと、性的な放蕩を繰り返していたことで、「道徳的であること」に対する反発があったからかもしれない。

本エッセイの終わりに、尤もらしい結論を出そうと試行錯誤したけれど、それは虚しいことだと悟った。僕はもう学生ではないのだ。

そして、僕は『愛すること』を本棚に戻した。

その背表紙の黄ばみが、他の本よりも際立っていた。